Vol.153　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

「近世村の成立」で知りたいこと

○近世の始まりと村の確立

近世社会を支えていたものは村だと言っていいでしょう。村は生産の中心で、日本全体で見れば10人のうち7～8人は村の住民でした。

では、村って何でしょう。商業施設がないか、あっても、まばらな存在にとどまっている地域、幕府や藩の言いなりになり、粒々辛苦、年貢を納めるため十年一日のごとく朝から晩まで農作業に従事している地域、あるいはまた、日々の暮らしが自然と結びついてはいるが、迷信にとらわれた地域だとかいって済ませてはいないでしょうか。

もしも、村が近世社会の基礎であったというのであれば、あるいは、近世社会の成立が村の成立とともに始まるというのであれば、その村とはいかなるものであったのか、その解明こそ近世史理解のカギとなるものとして、学問的に追究されなければなりません。

○近世池田の村

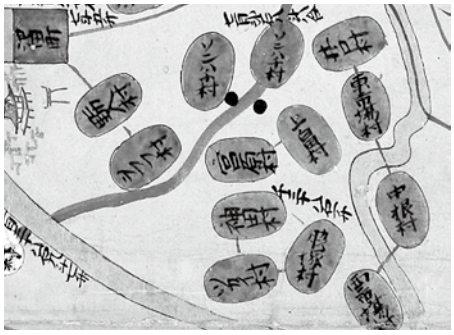
そもそも、村はいつ、どこから生じてきたのでしょうか。

鎌倉時代や室町時代といった中世社会に勢力を持っていた寺院や天皇・貴族あるいは武家などの系譜を引く家々には古文書の中に荘園の記録があり、そこに村とおぼしき名前が少なからず出現します。今につながるものもあれば、詳細不明のものも少なくはありません。

『新修池田市史』第1巻でも、荘園としての「呉庭庄（くれはのしょう）」「細川庄」などの名前が登場し、今に残る地名として宇保・池田・中川原といった名前が出てきます。そして、長らく戦乱が続くなか、荘園が力を失うとともに、かわって村が出現していくことが見通されています。

ただし、近世初頭になっても、まだ名前だけしか知られていない村も多いようです。また、その後出てこない村名もあるようです。試みに、池田市域について慶長8年（1603）征夷大将軍となった徳川家康に命じられて各国別に作られた『慶長国絵図』のうち「摂津国絵図」に記された村の名前をあげて見ましょう（『新修池田市史』第2巻22ページの図）。

細河地区では、久安寺（これは村ではなく、寺かもしれません）・門前町・吉田村・横山村（現川西市）・古家村・伏尾村・東山村・中川原村・木部村、池田周辺では、池田町・渋谷村・西畑村・東畑村・ソンハチ村・野入村・ヲフフ村、北豊島地区では、井口村・東市場村・中根村・西市場村・上畠村・宮原村・神田村・ツカイ村・脇塚村・堤内村・宮前村の各村名が、位置とともに記載されています。



慶長十年摂津国絵図（北豊島地区部分）
出典：にしのみやオープンデータサイト

いかがですか。でも、まだ分からないところもあるようです。いま一息の史料調査が求められているのではないでしょうか。

○文禄の検地帳が明らかにしているものについて

『新修池田市史』第2巻では畑村と神田村に残された文禄3年（1594）9月実施の検地帳が丹念に説明され、そこから分かることが論じられています。畑村については、46町9反余が確定され、年貢負担者が明示され、また村域と村境を確定したことなど、検地を通して中世の村が領主によって把握され、支配される近世の村になったと評価されています。ただし、近世村の成立については徳川政権確立以後の動きも重視されています。

ところで、このときに村域と村境を確定したという評価については、疑問が残ります。検地は、畑村を例に言えば、耕地と住居地の調査にとどまり、それらを大きく取り巻く山地とか沼や水路などは対象から外されているからです。実際、山地をめぐる境界争いは各地で生じています。

近世村とは何かという問題を理解しようとすれば、村に対する領主権力の支配という側面だけでなく、村の自立性を支えていたもの、また村と村あるいは町との関係性という問題も見ていかねばならないのでしょう。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

◆問い合わせは生涯学習推進課☎754・6674